

Title	インベルとショスタコーヴィチ : 1946-1953
Author(s)	武藤, 洋二
Citation	大阪外国語大学論集. 20 p.129-p.151
Issue Date	1999-03-30
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79788">https://hdl.handle.net/11094/79788</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# インベルとショスタコーヴィチ 1946—1953

武 藤 洋 二

## ИНБЕР И ШОСТАКОВИЧ 1946—1953

МУТО Ёдзи

### Содержание

- 1 Сны о ликвидации колхозов.
- 2 《Уж полночь близится, а музыки все нет》.
- 3 《Я завидую Михоэлсу...》.
- 4 《Музей закрыт по техническим причинам》.
- 5 О 《крови земли》.
- 6 《Мы—рабы》.

### Примечания

#### 1

4年間みずからの国土でドイツ軍と戦い、およそ3000万人の死者をだしたソヴェト国民は、勝利が苦難のつぐないをするだろうと期待していた。

まずやってきたのは、組織的、人為的な飢えであった。戦争によって労働可能な男の数は半減している。そのうえ1946年は干魃で不作である。しかし、在庫分と備蓄分をまわせば、餓死者はでないはずであった。民衆の犠牲を常套手段にしているスターリン指導下の党と政府は、食糧の手もち分をまわすどころか、農民からさらに収奪することによって、戦後の経済的再建と東欧諸国をふくむスターリン体制の強化と拡大の資金を確保しようとした。

農民たちは、戦時中、労働日数を増やされ、それをこなせない場合は、自分のコルホーズで6カ月以内の矯正労働につき、その間は収入の1／4をコルホーズに納めなければならなかった。自分の職場が矯正収容所をかねることになったのである。この戦時処置は戦後も続けられただけでなく、干魃による不作を理由に、農民は戦争中よりも多くのものを奪われた。

戦後、配給切符によるパンの保障が廃止された。政府はいわば手を放したのである。農業集団化の時と同じ政策がくりかえされた。飢えた民衆へパンを与えるどころか、政府は、1946～47年

の飢餓の年、穀物を250万トン輸出へまわしたのである。戦争直前の1940～41年の輸出量は140万トンであった。<sup>1</sup>

餓死は無いことになっていた。医師は、餓死だと診断することを禁じられ、別の病名をつけた。1932-33年の人災的飢饉のさいと全く同じである。

コルホーズの労働は、事実上ただ働きになった。あるコルホーズ員によれば、労働に報酬は支払われず、仕事へおびき出すために与えられるのは、「日に茶さじ一ぱいの薄いスープとパン50グラム、それも毎日でなく週に2、3回」<sup>2</sup>というありさまであった。

コルホーズ員たちの命の綱は、私用に耕作することを許されている付属地の収穫物である。彼らは、これで食いつないできた。1946年、政府はこれに対する税金を引き上げた。め牛1頭、羊2匹、豚1匹、じゃがいも畑0.15ヘクタール、野菜畑0.05ヘクタールを持つ平均的コルホーズ員の農業税は、戦争直前の1940年100ルーブリであったが、1952年には1116ルーブリになる。コルホーズでは何も支払われない奴隷労働をさせられ、自給地には極端な酷税をかけられ、コルホーズ員は、税をまぬがれるために家畜を殺し、果樹を切り倒すしまつであった。<sup>3</sup>

コルホーズ員は、体力も働く意欲も無くした。農民に飴を与える代りに、「農業における悪質な労働忌避者」を遠くへ移住させるソヴェト最高会議幹部会令が、1948年6月2日に布告された。これは、国家権力から農民への脅迫状である。コルホーズ員は、ただ働きを続けざるをえなかった。

都会へ食糧を買いに行くことすら禁じられている農民は、飢餓線上で何の希望もなしにくらしていた。この無明のなかでコルホーズ解散という幻想的なうわさが流れる。コルホーズ制度廃止の願望は、農民が史上はじめて抑圧から解放され、幸福な生活をおくっているという権力の嘘と真っ向から対立する。

絶望の中から自然発生した願望が、スターリンはコルホーズ廃止の意向だ、コルホーズ解体のための委員会がつくられた、アメリカとイギリスがコルホーズを無くすようソヴェト政府に圧力をかけている等々のつくり話を生みだしたのである。<sup>4</sup>

## 2

衣食住のどれもが極端に貧しいくらしのなかで、文化の全域におよぶ再統制が始まった。批判、弾劾、抑圧と同時に、賞、勲章、称号の大盤振舞がおこなわれる。

1946年6月26日ヴェーラ・インベル<sup>5</sup>は、『ほとんど3年ーレニングラード日記』と『ブルコヴォ子午線』により、スターリン賞第2位を受けた。これは、ドイツ軍によって封鎖されたレニングラードでの苦闘のたまものである。これは、自分の手で闘いとった安心である。スターリン体制下では、命と安全の確かな保障は、誰れにもどこにも無い。しかし、すくなくとも今、インベルは国家権力から花を贈られる立場にある。

スターリン賞の候補者は、各種の団体や組織および個人から推薦される。これが一般的な場で

検討され、それをうけて、スターリン賞選考委員会が候補者一人一人について秘密投票をおこなう。この結果を、党中央委員会宣伝煽動部がていねいに検討して党政治局決定の草案を作成し、スターリンに提出する。この草案の審議には、党政治局員だけでなく、科学アカデミー総裁、作家同盟書記長および関係大臣が出席する。討議はスターリンの下で長時間おこなわれるが、どのような意見があろうとも最終決定はスターリンがくだす。

スターリン賞の選考には、スターリン個人の意志が反映されているので、受賞者は一種の免罪符をもらった気分になる。経歴もくわしく調査されているので、インベルのように大きな傷をもち、その傷にたいする国家権力の対応と自分の人生の幸不幸とが直結している人間には、受賞はひととき嬉しい。なぜなら賞の時点では、その傷が凍結されているからである。

しかし、政治的必要性があれば、いかなる栄誉も一瞬にして剥奪される。スターリン個人の意見の変化や気まぐれも受賞者の運命をくるわせる。

インベルと同時にスターリン賞第1位を受けたアレクサンドル・ファジェーエフは、1年半後、1947年12月にはかならず受賞作『若い親衛隊』を『ブラウダ』で批判され、改作させられた。スターリンの指示である。ファジェーエフは、作家同盟書記長として、スターリンの注文を作家同盟に実行させる責任者であり、スターリンから直接指示をうける特権的地位にあったが、かけ出しの作家のように書き直して、スターリンを満足させた。

スターリンは、独裁者であるため超多忙な生活をおくっているが、文学作品をよく読み、自分自身の許可不許可が必要なものには色鉛筆で削除、書き入れを行い、誤りを訂正する。彼は、文字どおり「師」として行動し、検閲官の実務を行い、その指導は具体的で細かい。文学、映画、演劇の力を知っており、常に目を光らせていた。

芸術作品だけでなく経済学教科書や哲学の論文にいたるまで、スターリンは添削した。アンドレイ・ジダーノフは、学問、芸術のさまざまな分野の公的な集会で指導的な演説をおこなったが、その原稿は必ず事前にスターリンに見せ、手を入れてもらっている。

スターリンは、映画を、民衆にたいする影響力の点で最も重要な芸術だとみなしていた。彼は、まるで映画会社の製作責任者のように一作一作自分で検閲した。スターリンが意見を口にしないでも、試写会で途中で退席すれば、その映画は上映禁止または廃棄処分になる。「うん」という不満げな声をもらっただけのこともあった。それを耳にした映画大臣は、文化の最高責任者ジダーノフと一緒にその「うん」を分析し、同志スターリンによる不許可という結論をだした。<sup>6</sup>

俗に「ジダーノフ批判」と呼ばれるものは、スターリンの口頭による指示や断片的な示唆と感想から基本的なわくぐみが作られ、常にスターリンの意図、意向を察知しながらおこなわれたものである。ジダーノフは、革命前からの党员で、党中央委員会の書記、政治局員、組織委員の3役をかねて国家第2の地位にあったが、独裁者の主催する催しの司会者にすぎなかった。

独ソ戦中におこなう余裕のなかった音楽界の統制、方向づけにも大きな力がさかれた。1948年1月、党中央委員会でソヴェト音楽界の代表者会議がひらかれた。これは、スターリンを立腹さ

せたヴァノ・ムラデリのオペラ『大いなる友情』を槍玉にあげ、その批判を通じてソヴェト音楽全体にたがをはめる行事である。

ショスタコーヴィチ、ハチャトゥリャン、ゴーリデンヴェイゼル、カバレフスキ等70人以上のソヴェト音楽界の代表者たちを前にして、ジダーノフは、ムラデリの『大いなる友情』の「破産」がこのような会議を催すきっかけになった、と切りだした。この作品には、「覚えられるようなメロディは一つもない」、「大部分はけたたましい音の雑音なみの詰合せ」であり、北コーカサスの諸民族をとりあげながら、彼らの民族音楽が生かされず、作曲者は独創ぶろうとばかりしている、とジダーノフは叱った。<sup>7</sup>

これは、1936年のショスタコーヴィチ批判『音楽どころか雑音』に、内容も程度も極めて近い。その第2版である。ショスタコーヴィチには悪夢のくりかえしである。ジダーノフは、ムラデリの作品の欠陥がショスタコーヴィチの『ムツェンスク郡のマクベス夫人』の欠陥におどろくほど似ていると指摘して、『音楽どころか雑音』の引用を長々とやった。ちょうど、1936年には若いショスタコーヴィチの背後にメイエルホリドという大きな標的があったように、ムラデリをとうしてソヴェト音楽界の第一人者ショスタコーヴィチを意図的に批判しているのは明らかである。ショスタコーヴィチがスターリン賞第1位をもらってからまだ1年もたっていない。

『大いなる友情』の批判には、1936年にはない政治的理由があった。このオペラは、十月革命直後の北コーカサスにおけるソヴェト政権樹立のための闘いを主題にしている。作品ではオセット人、レズグ人、グルジャ人がロシア人を相手に闘っていたが、モスクワから派遣されたコミッサールのおかげで、友好関係をむすぶようになる。ジダーノフは、従って、スターリンは、ここに「歴史の偽造」を見た。「ロシア人と赤軍」とに敵対していたのは、チェチェン人とイングシ人であったにもかかわらず、作品では、オセット人やグルジャ人に置きかえられている、とジダーノフは非難した。

これは、スターリン体制下で芸術作品の運命がその当座の政治情勢、政策といかに連動しているかを示すみごとな例である。チェチェン人とイングシ人の多くが戦争中ドイツ軍に協力し、その命令でソヴェト政権に武装攻撃をおこなったという理由で、スターリンは、チェチェン人とイングシ人の全員を居住地から追放し、チェチェン・イングシ自治共和国を解体して、北オセット自治共和国、ダゲスタン自治共和国、グルジャ共和国等に配分した。

1944年2月23日の早朝、チェチェン人とイングシ人の強制移住が、内務人民委員ベリヤの指揮で始まった。チェチェン人は、移送のため駅へ連行され、一人も残さないよう、病人も妊婦も家から引きずり出された。抵抗した者、逃げようとした者、ロシア語の命令が分からない者は銃殺された。早く仕事をするために、まとめて焼き殺したり、池にしずめたり、途中で弱った者、足手まといの者を銃殺にした。チェチェン文化を無くすために、古文書、古記録、古い貴重本をはじめとする文化財と宝物が運び出され、それをつんだ車の列がつづいた。チェチェン語の地名は変えられた。<sup>9</sup>

呪いの歌がつくられた。

スターリン、お前は日の出を奪った  
スターリン、お前は日の入りを奪った  
スターリン、お前は祖国を奪った  
神様がお前を棺おけの中に隠してくれますように

スターリン、お前が日の出を奪われるように  
スターリン、お前が日の入りを奪われるように  
スターリン、お前が一番大切なものを奪われるように  
私たちからお前が故郷を奪ったように<sup>10</sup>

イングシ人にたいする扱いも同じである。居残る者は、「人民の敵」として銃殺する命令がでていたので、足手まといになる老人や病人は銃殺され、谷底へ投げ捨てられ、あるいは、生きたまま焼かれた。

スターリンの命令が全員の移住であるかぎり、残存者をだせば、命令不覆行で蔽罪がまっている。現場の実行責任者は、恐怖から犠牲者にとびかかる。これがスターリン体制を動かすばねである。イングシの老人と孫が山の中で放牧していて、強制移住のことは知らなかった。老人は、身内と合流したいと言ったが、列車は出発したあとだった。居残った者を命令どおり銃殺した物的証拠として、2人の頭は切断された。<sup>12</sup>

強制移住の見事な仕事ぶりに対して、半月後ベリヤを筆頭に666人が勲章をもらった。<sup>13</sup>

チェチェン人とイングシ人の運命は、ソヴェト諸民族強制移住史の一こまにすぎない。

オペラ『大いなる友情』にたいする批判の裏にはこのような悲劇が隠れている。チェチェン人とイングシ人は、30年前の十月革命時においても悪者でなければならない。ここまで気がまわらなかった作曲者と台本作者は、「歴史の偽造」で責められている。

この会議が開られている時にも、チェチェン人とイングシ人は、中央アジアの特別移住区で政治警察の監視をうけながら、棄民としてどん底生活をおくっている。

ジダーノフの演説のあとで、さまざまな発言者がムラデリよりもショスタコーヴィチを批判するのに熱心であった。ショスタコーヴィチも発言し、ムラデリにはオペラを作曲するだけの能力がないとはっきり指摘したうえで、彼が自分の誤りの責任を母校やその教師にかぶせていると叱った。

「彼は、我が国の音楽戦線の一般的な状況にあまりにも罪をきせずぎたように思われます。ムラデリは、まるでわざと不出来なオペラを作曲したかのように言っています。自分はオペラの作曲を心得ていたけれど、正しい教えをうけなかった、しかも、自分が望むように、そして、自分

の能力に応じて、作曲することができないような状況が音楽戦線にあったというわけです。こういう考え方は、作曲家のあいだに無責任な気持を生みだすことになります。自分の失敗は、芸術国家委員会のせいだとか、音楽院のせいだとか、作曲家同盟のせいだと言いだすでしょう。自分の失敗にたいしては、まず第一に、作曲家自身が責任をとるべきだと私は考えます。」<sup>14</sup>

ソヴェト全体が階級闘争の戦場なので、戦線という言葉がいたるところで使われていた。文学は文学戦線であり、『大いなる友情』批判は、音楽戦線の戦闘行為である。あらゆる分野に敵がひそんでいるはずであり、敵を見つけ出すことが万人の義務になっている。総司令部クレムリンの号令でおこなわれるこの種の会議は、自衛のためと出世のために敵をつくっていく場になりやすい。責任を他人に転嫁するムラデリの自衛策は、敵をつくる行為である。それはまた「公開の場での密告」になる。ムラデリをたしなめるショスタコーヴィチの発言は、一般的な道徳の次元でなく、スターリン体制という政治的文脈のなかで現実的な意味をもつ。

1カ月後、1948年2月10日、党中央委員会決定『ムラデリのオペラ「大いなる友情」について』が発表された。これは、ムラデリをひきあいにして、ソヴェト音楽の「形式主義的傾向」に警告をだし、「形式主義的、反人民的傾向をもった作曲家たち」の代表としてショスタコーヴィチを名ざしで批判した。ショスタコーヴィチ、プロコフィエフ、ハチャトゥリャン等が、「ソヴェト人民とその芸術的好みにあわない形式主義的歪曲と、音楽における反民主主義的傾向とがひときわ目だってあらわれている作品」<sup>15</sup>の作曲者として槍玉に上がった。

超一流の作曲家だけでなく、音楽評論家、音楽院、ソヴェト作曲家同盟組織委員会、芸術国家委員会まで批判されている。党中央委員会決定は、ソヴェト音楽界全体を、いわば、共犯関係にあるととらえ、「ソヴェト音楽における形式主義的傾向を反人民的で、実際に音楽の滅亡に通じるものとして弾劾すること」<sup>16</sup>を義務づけた。

この指令をうけて、さまざまな組織と機関が動きだす。批判の対象が名ざしされているので、それに石を投げればお上への奉公になる。追いうちをかけることによって、自分の忠誠心を売りこむことができる。つばをはきかけるには才能も知識もいらないから、音楽の素人でもショスタコーヴィチを批判できる。

3月1日、この文書を討議するためにモスクワの作家たちが集められた。大会幹部団には、フェジェエフ、レオーノフ、スルコーフ、カターエフ等とならんでインベルも入っている。

詩人スルコーフは、作曲家たちをやっつけたついでに、「外国の唯美主義者たちによってありとあらゆる方法で讃美されているパステルナークの個人主義的な創作」<sup>17</sup>を攻撃した。ショスタコーヴィチよりも、同業者で長年の嫉妬の対象であるパステルナークを批判する方が、スルコーフ個人には得である。

インベルは、ドイツ軍による封鎖下のレニングラードでショスタコーヴィチの第7交響曲を聴き感動した。それは彼女にとって神聖な思い出である。しかし、それから数年たった今は、ショスタコーヴィチを讃える時でなく、叩く時である。

「私は音楽が大好きです。しかし、ショスタコーヴィチの作品を聴く気になるなんて考えられません。我がロシアの音楽は、表現手段の並はずれた豊かさと多様性できわだっており、われわれの感情と気分を複雑なままに、そして、じかに伝える能力をもっています。これは、明晰な、メロディに富んだ、誰れにでも分かる、極めて民衆的な音楽であります。残念ながら、我が国の現代音楽に関してはこうは言えません。あるオペラを聴いていて誰れかがこんな冗談をとばしたのもむべなるかなです。『もう真夜中になろうとしているのに、あいかわらずまだ音楽がない。』ソヴェトの作曲家たちが、我が国の人民にふさわしい音楽を作りだすだろうと私は確信しています。」<sup>18</sup>

自分の気持をいつわったインベルのこの発言は、時代の鋳型に合わせた平均的なものである。全国各地で開られる集会で無数の口が布告の内容をくりかえしたうえで、自分から何かつけ加わえて貧者の一灯をささげる。この一灯があつまって大きな火となる。この火中でショスタコーヴィチは、レニングラード作曲家同盟の指導者の地位を奪われ、モスクワ音楽院を解雇され、作品は演奏されなくなり、収入はとどえた。

## 3

1948年1月13日、ソヴェト・ユダヤ文化の中心人物ソロモン・ミホエルスが、スターリンの直接の命令で、白ロシア共和国ミンスク市で自動車事故をよそおって殺された。ミホエルスは、イディッシュ語で上演する国立モスクワ・ユダヤ劇場の芸術監督であり、ソヴェトを代表する名優の一人であった。

ソヴェト音楽代表者会議に出席していたショスタコーヴィチは、自分に批判の矛先がむけられていた長時間の討論会で疲れきっていたが、ミホエルス家を訪れた。弔問客がごったがえすなかで、ショスタコーヴィチは、ミホエルスの娘ナターリヤとその夫で作曲家のヴァインベルグを抱きしめて、静かな声ではっきりと言った。

「私は彼が羨ましい……」<sup>19</sup>

数年後、1953年2月ヴァインベルグが逮捕されたとき、ショスタコーヴィチは、この「人民の敵」を救おうとして、彼の人格を保証する旨の手紙をベリヤあてに書いた。ナターリヤは、その手紙をクレムリンにもっていった。ユダヤ人をめぐるでっちあげ事件が続いているなかで、ミホエルスの娘婿を擁護するのは極めて危険であった。彼女がショスタコーヴィチの身を心配すると、彼は、「心配しなくていい、心配しなくていい、彼らは私に手を出しません」と言った。<sup>20</sup>

ミホエルスの死を羨ましいと言い、国家権力が自分に手を出さないと言う、この二つの言葉の中にショスタコーヴィチの立場があらわれている。彼は、国家にとってどうでもいい人間ではない。彼の才能は必要であり、国家はただそれを必要な方向へ発揮させればいいのである。だから、批判と賞賛、兵糧攻めと栄誉が交互にあらわれた。これは、ショスタコーヴィチに仕事をさせるためであり、彼が殺されないことを意味する。このことを彼は承知していたのである。



ミホエルスは、殺すほうが得な時がきたので殺された。独ソ戦中は、ユダヤ人絶滅をはかるドイツと闘っているソヴェトあてに外国のユダヤ人から募金を集めるため、反ファシズム・ユダヤ人委員会委員長ミホエルスは海外へ派遣され、大きな功績をあげた。彼は、国家に巨大な実益をもたらした。

独ソ戦に勝つと、ユダヤ人としてのミホエルスと同委員会の有用性は、基本的に無くなる。ファシズムという共通の敵がいなくなると、ソヴェトと資本主義国は、当然、以前の敵対関係にもどり、冷戦のなかで、外国のユダヤ人とのつながりは、スパイ行為と同列におかれるようになる。反ファシズム・ユダヤ人委員会は、この点からも警戒され、監視の対象になっていた。

1947年12月10日、スターリンの亡妻のおじの妻であるエヴゲーニヤ・アリルーエヴァが逮捕された。国家保安省は、彼女の知人をも逮捕し、拷問によって、反ファシズム・ユダヤ人委員会がスパイ組織であり、その長であるミホエルスがアリルーエフ家からスターリンについての中傷的情報を集めるよう命令を下したと“自白”させた。国家保安省は、他にも“関係者”を逮捕し、同委員会が外国のユダヤ人のスパイ組織とつながっていること、ミホエルスとアリルーエフ家とがぐるであることを、拷問によって“白状”させた。これにもとづいて、つまり、自からの脚本によって、国家保安省は報告書をつくり、スターリンに呈出した。3日後、ミホエルスが殺された。<sup>21</sup>

スターリンの親族の逮捕やミホエルスのような世界的知名人にたいする工作には、スターリンの許可が絶対的に必要だから、ミホエルス殺害の脚本がスターリンの指示によってつくられたことは明らかである。

部下の演説や学術論文を添削するこの独裁者は、ミホエルスの殺し方まで教えている。スターリンが国家保安省にミホエルス殺害の方法を電話で指示しているとき、娘スヴェトラナが部屋に入ってきて、「自動車事故だぞ」という父の言葉をはっきり聞きとっている。

ミホエルスは、まだスターリン賞をもらっていないとき、娘ナターリヤに言った。

「なんじの蜜も、なんじの一刺しも私には無用」<sup>22</sup>

ミホエルスは、1935年ロシア共和国人民芸術家、39年レーニン勲章、ソヴェト人民芸術家、41年教授の称号をうけ、46年インベルなどと同時にスターリン賞を受賞した。蜂は、このユダヤ人に十分蜜を与えたあと、致命的な一刺しを加えたのである。蜜をなめさせることも、針で刺すことも、ともに蜂の一存一用不用の掟による。

ミホエルス殺害は、公然としたユダヤ人弾圧の開始であった。ミホエルスの葬式が終わると、反ファシズム・ユダヤ人委員会の幹部の逮捕が始まった。ミホエルスと長年にわたって共演してきたズースキンは、病床で逮捕される。

ミホエルス殺害から4カ月後、1948年5月14日、イスラエルが建国された。2日後、ソヴェト政府は、国内のユダヤ人問題とはひとまず切り離し、中東におけるイギリス支配に抵抗する拠点としてこのユダヤ人国家を承認する。1900年ぶりに復活した祖国からの使者メイヤーを、モスク

ワのユダヤ人たちは熱狂して歓迎した。9月に祝われるユダヤ人の正月ロシュ・ハシャナには、数万のユダヤ人がシナゴグでメイヤーを待ちうけた。

外国との交流を遮断され、鎖国状態がつくりだされ、ついこのあいだ1947年2月15日に外国人との結婚禁止令まででているソヴェトで、ソヴェト市民であるユダヤ人が、自分たちの祖国あるいは「史上の祖国」からの使者としてメイヤーを迎えている。この光景からは、彼らがイスラエルかソヴェトかどちらに忠誠心をもっているのか不明である。

さまざまな所のユダヤ人から、イスラエルへ出国したいという手紙が、反ファシズム・ユダヤ人委員会によせられた。同委員会がソヴェトにおけるイスラエルへの窓口のように見なされていたのである。町中のユダヤ人がイスラエルへの移住を希望している例もある。ジメリンカ市のユダヤ人たちは、「祖国イスラエル」へ行き、「ユダヤ民主共和国」を創りたいという手紙を『プラウダ』に送っている。<sup>23</sup>アラブからイスラエルを守るために義勇兵として出国したいという若いユダヤ人も少なからずいた。

ソヴェト権力は、ソヴェト・ユダヤ人の両面性をはっきりと確認できた。1947年3月、アメリカは、共産主義封じ込め政策（トルーマン・ドクトリン）を発表している。資本主義国との冷戦のなかで、党と政府が国内のユダヤ人を外国の飛び地なみに警戒するようになったのは不思議ではない。

ユダヤ人にたいする全面的な迫害がおこなわれる。その一環として、ユダヤ人を受難者の特別な地位から引きづりおろす。ユダヤ人は他の民族と同じく戦争の一被害者にすぎないのだ、とナチスのユダヤ人絶滅政策についての記憶を消す仕事が始まる。ユダヤ人はどの点においても突出させてはならないのである。第2次大戦中のユダヤ人の運命を勲章にして、ソヴェト・ユダヤ人が戦後の世界で特別な影響力を持つことを阻止するためである。

ソヴェト・ユダヤ人の受難史を消す必要性が、別のところからもでてきた。1949年10月7日、ドイツ民主共和国が発足した。ナチスの被害を受けたソヴェト、ポーランド、チェコスロヴァキヤ等と一緒に、東ドイツがソヴェト圏の一員として共存共栄していくためには、建国にあたってナチスの影をぬぐい去る必要があった。加害者ドイツ人と被害者ユダヤ人をドイツ人とユダヤ人にもどす作業がおこなわれる。この対等性を確保するために、スターリンは、「ドイツ・ファシスト占領者とその仲間による悪行と戦争犯罪を確定し調査する委員会」を解散させた。

ユダヤ人の被害を強調しない、特別視させない政策はミホエルス殺害以前からあった。反ファシズム・ユダヤ人委員会は、戦争中からナチスのユダヤ人絶滅についての事実を調査し、収集してきた。アインシュタインの提案もあって、同委員会はユダヤ人にたいするナチスの犯罪についての『黒書』を出版することにした。1947年6月には、出版所デル・エメスが『黒書』を5万部印刷したが、10月、「重大な政治的誤り」を理由に発行禁止になった。<sup>24</sup>

1948年11月20日、党政治局は反ファシズム・ユダヤ人委員会の解散を決定した。

ユダヤ人は、ユダヤ人であるという理由で各地で解任され解雇された。コスモポリトーン祖国

ソヴェトに根をもっていない世界人—という呼称が使われ、反コスモポリト運動という名でユダヤ人追い出しがおこなわれる。コスモポリトは、戦時中の日本の「非国民」と同類の政治用語である。コスモポリトであることを“証明する”ために、こっけいな非論理が横行した。

ある大学の英文学科のユダヤ人講師の論文を、コスモポリト狩りの目的で再点検することになった。その仕事をたくされた同僚は、苦しまぎれにこんな証拠を見つけだした。シェクスピアの『ベニスの商人』に登場するユダヤ人の高利貸しシャイロックについて、プーシキンがいくらか肩をもつことを言っている。プーシキンのその言葉が論文に引用されていた。論文の著者は、ユダヤ高利貸し資本の代表者（シャイロック）に心をよせ、それを持ちあげることによってアメリカ帝国主義に奉仕している、とこの審査員は結論した。論文の著者がコスモポリトだと証明されたのである。<sup>25</sup>

この荒唐無稽ないいがかりは例外ではない。政治警察の脚本はもっと現実ばなれしている。スターリン体制下では、雲をつかむような話が人の運命を激変させるのである。

『黒書』の抹殺は、インベル個人にとっても痛手であった。それにはオデッサのユダヤ人についての彼女の文がのっていた。それは、書かれた時点では評価されるべき仕事だったが、今では、『黒書』に関係していることだけでも汚点であり、インベルの権力への奉仕史のなかでは失点になる。

#### 4

インベルにスターリン賞をもたらしたのは、レニングラードの封鎖から生まれた散文と詩であった。ところが、今、この得点もまた失点に変わる危険性がでてきた。レニングラードの関係者であることが、傷に、運が悪ければ、致命傷になる状況がうまれたのである。

1948年12月25日におこなわれたレニングラード州・市党委員会の合同総会で、幹部の選挙のさいに不信任票があったにもかかわらず、満場一致で選出されたと偽った、という密告状が党中央委員会にまいこんだ。

1949年2月15日、党政治局会議にレニングラード州・市党委員会第一書記ピョートル・ポプコーフが呼ばれ、同日付で解任された。またこの日に党中央委員会書記アレクセイ・クズネツォーフ（元レニングラード州・市党委員会第一書記）、ロシヤ共和国首相ミハイル・ロジオーノフも地位を剥奪された。

2月21日、22日にひらかれたレニングラードの党の会議に、モスクワから党政治局員ゲオルギイ・マレンコフが乗りこみ、レニングラードの党委員会が党中央にたてつき、対抗しようとした、と分離主義を非難した。彼は、レニングラードの党第一書記に自分の子分ヴァシーリイ・アンドリアーノフを選出させた。この旧都のあらゆる部署で指導部が入れかえられ、夏になると、かってレニングラードで高い地位を占めていた者がのきなみに逮捕される。

逮捕者のなかの最大の人物は、ニコライ・ヴォズネSENSキイである。彼は、35才で国家計画

委員会議長となり、40才にならないうちから第一副首相をつとめ、単にきわだって有能な実務家であるだけでなく、経済学者としては科学アカデミー正会員であり、党人としては党政治局の正局員である。彼は、レニングラードで働いたことがあり、今、でっちあげられつつある「レニングラード事件」に中心人物として登場させられることになった。

ベリヤの指揮下で国家保安相アヴァクモフを実行責任者として「レニングラード事件」の“関係者”の大量逮捕がおこなわれる。

ヴォズネSENSキイ、クズネツォーフ等もっとも地位の高い6人の「被告」が、拷問をうけたあげく、1950年10月1日に処刑された。これ以後、中堅層の殺害が続く。

「レニングラード事件」は、未来のスターリン達に必要であった。60才代後半に入った独裁者のもとで、先を見こして権力争いが進行していた。1946年、スターリンは、自分の後継者として党ではクズネツォーフ、政府ではヴォズネSENSキイを考えていると言った。今、この2人が殺されたのである。

クズネツォーフがレニングラードからジダーノフによって引きぬかれ、党中央委員会書記になったのにひきかえ、マレンコーフは、書記を解任されて、中央アジアへ左遷された。これは大転落であった。

ベリヤは、戦前から内務人民委員として政治警察の最高責任者であり、スターリンの「抜き身の刀」であった。ところが、戦後、1945年12月29日この仕事からはずされ、原爆開発の総責任者に任命された。内務、保安の分野を指導し監督するのが党中央委員会書記としてのクズネツォーフの任務である。

ヴォズネSENSキイは、経済の分野における知識と実務の両面で他の権力者たちを圧倒し、実質的には政府の中心人物であった。モロトフ、マレンコーフ、ベリヤ、カガノーヴィチは、ヴォズネSENSキイとちがって、高度な専門的知識をもたない古い政治家であり、スターリンの命令の実行者にすぎなかった。戦後の経済復興という難問の前に彼らは無能無力であった。

ヴォズネSENSキイもクズネツォーフもジダーノフの子飼いとみなされていた。この2人が経済と公安という重要分野を担当するのである。

戦後、文化の総責任者になったジダーノフは、1934年末から1944年末までレニングラード州・市党委員会第一書記であった。この後、党中央の仕事に専念し、このさい、10年間のレニングラード生活の中でつちかった人材を中央へよびよせた。これが、いわゆるレニングラード派と意図的に呼ばれることになる党官僚たちである。

1948年8月1日、マレンコーフは、元の地位にかえり咲いた。スターリンに次ぐ地位にあったジダーノフが、8月末に急死した。「レニングラード派」の総師の死は、大陰謀のきっかけを与える。

ゲオルギイ・マレンコーフは、ジダーノフ死去の時点で、党政治局員、党中央委員会書記、党中央委員会組織委員の3つを兼ねて、党官僚の最高峰にあり、しかもまだ40才代なのでスターリ

ンの後継者になる可能性をもっていた。

マレンコフの地位を脅かした者も、これからの後継者争いで対抗馬になる者もともに「レニングラード派」の中にいる。マレンコフは、配所の月をながめさせられたので必死である。他ならぬマレンコフがレニングラードに乗りこんだのも、クズネツォーフ等5人が非合法に逮捕されたのがマレンコフの執務室であるのも、彼が「レニングラード事件」の捏造者であり、実行の中心人物だったことのあらわれである。

レニングラードには、十月革命直後1917年12月から1926年3月まで、グリゴリー・ジノーヴィエフが市ソヴェト議長として君臨し、スターリンと党中央に対抗した歴史がある。レニングラードをあたかも独立王国にする分離主義という罪状は、ジノーヴィエフについての記憶をよびさます力をもっている。スターリンは、ジノーヴィエフを銃殺し、レニングラードを洗うように粛清したが、この大都市への警戒心は消えない。「レニングラード事件」の脚本は、心理的にもスターリンに受けいれやすいものであった。「レニングラード事件」という大型の政治犯罪がスターリンの許可と監督のもとにおこなわれたのは言うまでもない。

この事件は、呪術支配の未開社会をおもいださせる。呪われた場に居あわせた者は、それだけで共同体を追われる。事件をたくらんだ者にとって、地位の低いレニングラード関係者など自分たちの利害とは何の関係もなかったが、事件の首尾一貫性のために、そして権力闘争であることをさとられないためにそのような犠牲も必要であった。

独裁国家は、一人の、あるいは、一にぎりの権力者に極悪犯罪をおこなう自由と力とをあたえるのである。

1945年1月27日、ドイツ軍の封鎖に耐えぬいたレニングラードにレーニン勲章が与えられた。「レニングラード事件」の主要な被告たちは、レニングラード攻防戦の功労者たちである。「事件」の実行者たちには、レニングラードとその関係者を栄光の座から追いはらう必要があった。受難の記憶を、ユダヤ人からだけでなくレニングラードからも奪う作業が始まる。2つの受難史の抹殺が同時に進行する。記憶の抹殺は、スターリン体制の常套手段である。

レニングラードの封鎖がまだ解けていない1943年12月4日、常設展「レニングラードの英雄的防衛」をひらくことが、レニングラード戦線軍事委員会とレニングラード市党委員会の合同会議で決定された。政府は、戦勝後1945年10月5日、これをレニングラード防衛博物館に昇格させた。博物館は、1946年1月に開館する。

クズネツォーフ等が逮捕された1949年8月、博物館は閉じられ、とびらには「技術上の理由で閉館」というふだがかけられた。

この博物館に創設準備の段階から働いていたニーナ・フジャコーヴァによれば、レニングラード封鎖についての神話がつくられ、そこでの戦いが特別あつかいされ、展示物で「人民の敵」クズネツォーフ、ポプコフ等が宣伝され、スターリンの役割が過少評価されている等の罪が博物館にきせられ、館長も副館長も逮捕された。博物館は、1952年末に消滅する。<sup>26</sup>

ユダヤ人の受難の記憶もレニングラード封鎖の記憶も、目下の政策の邪魔である。これはインベルにとって、大変なあてはずれであった。

5

民族共和国、労働組合、農民組織ならびに文化人から、死刑廃止令が祖国の裏切り者、スパイ、後方破壊者に適用されることのないように、同法令の改正が必要であるという申し出がよせられているのにかんがみ、ソヴェト最高会議幹部会令は、次のとおり決定する。

1 1947年5月26日付の死刑廃止についてのソヴェト最高会議幹部会令の例外処置として、祖国の裏切り者、スパイ、後方破壊者にたいして最高刑として死刑の適用を認める。

2 この法令は公表の日から効力をもつ。

1950年1月12日、とつぜん公布されたこの命令で、大量の死刑が必要になる事情がクレムリンにあることを、誰れもが、直感しただろう。この体制下では布告としての発表があり報道がない。「レニングラード事件」の存在すらも民衆には分らない。ただレニングラードの関係者が逮捕されていることを噂で知る。今回の発表でも、何かが準備されていることを感じるだけである。

国民名層からの申し出は、独裁権力のきまり文句である。密室で決められた決定が、世論のない国で広範な世論を潜称する。最高会議幹部会令は、スターリンの命令がまとう法的な衣<sup>ころも</sup>である。祖国の裏切り者、スパイ、後方破壊者は、政敵を抹殺するために乱用されてきたスターリン体制用語である。

戦後、政治的計算にもとづいて、「平和が長期にわたって保障された」という理由で死刑が廃止され、25年の矯正収容所刑に代えられた。この平和のよそおいは、2年8カ月続いただけで、今、死刑が復活した。しかし、死刑廃止令を無くすのではなく、その例外を認めるだけだと、平和のよそおいは続く。

たえず触手を動かし、さまざまな信号をとらえようとしているインベルは、もちろん、身がまえただろう。しかし、彼女にできるのは、文筆活動によって、その時その時の政治状況に投機することだけである。彼女は、詩にとっての自殺行為で生きのびていく。

この年の9月、インベルは、5人からなる作家の団体で中央アジアへ行った。水について書くためである。戦後すぐの早魃から分るように、水と緑は死活問題である。2年前、1948年10月20日、「スターリンの自然改造計画」が発表された。これは、ソヴェトのヨーロッパ地域に豊作を保障するため、防風林や水源を増やしていく巨大な計画である。各地で農民が動員されて木を植えている。インベルが水と緑で一仕事しようとしたのは当然である。またそれは上からの要求でもある。水と緑が命と直結しているのは大砂漠と荒野のひろがる中央アジアである。インベルはそこへ、いわば、出稼ぎに行ったのである。

スターリンは、植林の指導者に農業アカデミイ総裁ルイセンコを任命した。ソヴェト遺伝学を

圧殺したこの歴史的な詐欺師は、素人なみの誤りをおかして、国家に天文学的な損失をあたえることになる。<sup>27</sup>

どん底にあったショスタコーヴィチは、この自然改造計画を使って『森の歌』を作曲し、スターリン賞第1位をもらい、批判後の「本質的な変化」<sup>28</sup>を証明する。『ムラデリのオペラ「大いなる友情」について』という決定は、最初、党中央委員会宣伝煽動部で草稿を作成したとき、攻撃的な文言もなければ、ましてやショスタコーヴィチ等を罪人のように名ざしで非難することもない、おだやかなものであった。ところが、スターリンも参加する最終段階で激しい文句が書きこまれ、人名がいれられた。<sup>29</sup>スターリンがショスタコーヴィチを名ざしにし、名ざされたショスタコーヴィチが『森の歌』でお返しする。スターリンは、お返しを期待できる才能だったからこそ彼を批判させたのである。『森の歌』は、まさに今、必要であり有益である。もちろん、この作品は、生みの親にとっては鬼子であった。

ショスタコーヴィチは、同じ時期、同じ政治状況のなかで、全く別の方向の仕事もしている。連作『ユダヤの民謡から』を作曲したのである。1949年9月25日、自分の43才の誕生日に、ミホエルの娘夫妻を自宅に招待し、これを聴かせた。若いロストロポーヴィチも居た。新曲は、このユダヤ人たちに強烈な印象をあたえた。それが「スターリン晩年のユダヤ人狩りにたいするショスタコーヴィチのあからさまな抗議」だったからである。<sup>30</sup>次の年の誕生日には、レニングラード音楽院で教えているイサーク・グリークマンを招き、サムイル・マルシャークと共にこの曲を聴かせた。<sup>31</sup>これはユダヤ人の友への激励である。ユダヤ人迫害のときに、自宅でこの曲を演奏するのは、禁断の詩をひそかに朗読するのに等しい。

カラクムとキジルクムの二大砂漠をかかえた中央アジアでは、水の供給が太古から死活問題であった。1950年9月12日、アム・ダリヤ河とクラスノヴォツクを結ぶ、長さ1100キロメートルのトゥルクメニヤ基幹運河を建設する決定が発表された。インベルは、これを伝えるモスクワ放送をウズベク共和国のブハラで深夜に聞いた。次の日、あるカザフ人の女性が、トゥルクメン人のところに大きな運河ができて、そのおかげで砂漠に果樹園ができるようになるっていうのは、つくり話だろうかとインベルにたずねた。

「『いいえ、これは本当です。スターリンが補佐役たちとそのように決めたのです。』

『もしスターリンが言ったのなら、つまり、つくり話じゃない。つまり、本当のことだね。』<sup>32</sup>インベルの仕事は、この地方で「地の血」と呼ばれる水が、スターリンの贈物として豊富に与えられるだろうと予祝することである。

「水の力、樹木と灌木の防風作用、ありあまる太陽の熱と光——これら全てが我がスターリン時代には人民の幸福のために使われるだろう。

『新しく灌漑された土地』が一面のオアシスになるだろう。その時、ある学者——詩人ですらない——の名言によれば『砂漠に緑の死がおとずれる』。

いいかえれば、命が。」<sup>33</sup>

トルクメニヤ共和国の8割がカラクム砂漠である。さわるとやけどする70度をこえる熱砂が、風によって数百キロ、数千キロかなたの植物を枯らしてしまう。このような所では水の一滴は血の一滴である。巨大な水利施設が必要であり、その水によって広大な防風林をつくろうとするのは当然である。

誰れの手でおこなうかが問題である。スターリン体制下では、大型の工事は、経済関係の省庁でなく、政治警察が担当する。飛行場、鉄道、道路、鉱物資源、木材等とならんで水利施設の部が内務省の中にある。これは、工事や開発に矯正収容所の囚人を使役することが制度化されていることを意味する。

政府決定により、トルクメニヤ基幹運河建設のために、中央アジア水利施設建設公団が設けられた。<sup>34</sup>これは、内務省の一部門で、内務次官の管轄下にある。ここへ運河掘りのための囚人が大量に投入されることになる。囚人のほとんどは「人民の敵」という無実の政治犯である。1949年には、1930年代に囚人であった者が再び逮捕され、国の囚人労働が増やされている。

1933年に白海・バルト海運河建設の現場へ招待され、囚人労働を賛美したインベルは、これから始まる運河建設が誰れの手でおこなわれるか人一倍承知している。

もちろん、許されるのは祝福だけであり、インベルは旅行記『水の線上で』によって「緑の死」を予祝した。

1951年インベルは詩集『水の道』を出版した。これには、作家会議に出席するため1946年に3週間滞在したイランの水と、ソヴェト中央アジアの水を歌った13篇の詩がはいっている。当時としては極めて上等の紙で印刷されており、この詩集の政治的評価を感じさせる。

中央アジアへの旅行記の表題は、ソヴェトの水が線となってひろがっていくことを暗示しているが、この詩集の「道」は、「線」と対極のものをあらわす。イラン王国の水が平等に万人へ行きわたるのではなく、国王、大臣たちと貧農、ペルシャじゅうたんの織工とでは水の分配にさまざまな不平等があり、「道」とは、水を手にする者たちの階層序列のことである。作者の意図は、イランの水の階層性と「人民の財産」であるソヴェトの水の民主性を単純明快に対比することである。ソヴェトを讃美するためのこの比較ぬきには、イランへの出張はインベルにとってただ働きになってしまう。

イランの下づみの人間に同情しながら、インベルは、ソヴェト経済の下働きに対しては全く逆の立場に立つ。

誰れが運河を建設したのか  
大地をよみがえらせて  
この英雄の  
名は集団



前方に向かう

集団

党が導く

集団<sup>35</sup>

灼熱地獄で奴隷労働している「人民の敵」は、お祝いの歌『スターリン記念フェルガナ大運河』にふさわしいように、無菌の抽象物へ変えられる。

詩集『水の道』は、水の讃歌の形をした、スターリン支配下のソヴェト体制への讃歌である。このたあいな詩集は、恐怖の時代にインベルの政治的純潔と忠実さを証明する仕事であった。

インベルが中央アジアに居る間も、「レニングラード事件」の逮捕者がつづく。ヴォズネセンスキたちの銃殺から2週間後、10月14日、作家同盟はインベル60才祝賀の夕べを催した。彼女の誕生日は7月10日だが、あたかも水路への旅をねぎらうかのように旅のあとで祝われた。

この公的行事は、インベルの安全にとって大きな意味をもっていた。ユダヤ人とレニングラードの関係者が迫害されているとき、レニングラードの関係者であるユダヤ人インベルに祝賀の宴がはられたのである。

## 6

1952年夏ソヴェト最高裁軍事法廷は、非公開の裁判で反ファシズム・ユダヤ人委員会の件を審議した。被告は14人である。そのうち13人に、全財産没収のうえ銃殺の判決が下った。

被告のなかには4人詩人がいた。フェフェル、マールキシ、クヴィートコ、ゴフシテインである。イディッシュ語で詩を書くイサアク・フェフェルは、委員会ではミホエルの片腕で、アメリカへの募金運動にも同行した。フェフェルは、裁判では自分だけの隔離審理を要求し、そこで、自分は国家保安省から送りこまれた者であり、その指示にしたがって行動したと言った。<sup>36</sup>しかし、その奉公は考慮されず、口封じなのか、死刑をまぬがれなかった。このあつかいは、スターリン体制下ではめずらしくない。ミホエルのミンスク行きに同行した演劇評論家ヴラジーミル・ゴールボフは、国家保安省の協力者であったが、ミホエルと一緒に国家保安省の工作人員によって惨殺された。

ただ一人だけ死刑をまぬがれたリーナ・シテルンは、財産没収せずに矯正収容所3年6カ月、満期後は5年の流刑という例外的なあつかいをうけた。彼女は、学者の最高の地位であるソヴェト科学アカデミー会員に女性として初めて選ばれた生理学者である。科学アカデミー付属生理学研究所所長、モスクワ第2医科大学生理学講座主任教授であり、生命活動の基礎についての歴史的業績をもつ世界的な学者であった。

判決を前にして、シテルンは7月11日、法廷で最後の希望をのべた。

「私を逮捕することによって、ソヴェトは、反ファシズム・ユダヤ人委員会の全活動よりもは

るかに大きな損害をこうむっています、なぜなら、これは私の仕事の信用を傷つけ、全ての達成を無にってしまうかもしれないからです。私は、自分の仕事を医学における新しい一頁だとみなしています、自分の知っている全てを墓場へ運び去る権利が私にあるとは思いません。私の仕事は、国民にとってとても大切なものだと思います。心臓治療の分野における私の第2の仕事は、すでにほとんど完成しかかっています。第3の仕事は、完璧な治療薬をつくることです。

私は、自分を有罪だとは認めません、仲間たちと一緒に仕事を続ける可能性をもう一度あたえて下さるようお願いします。」<sup>37</sup>

シテルンは、ラトヴィアのユダヤ人で、スイスに留学し、ジュネーヴ大学教授になった。この時代にすでに大きな学問的業績をあげている。1925年満ちたりた生活をすてて、すっからかんのソヴェトにもどってきた。あと1カ月で74才になるシテルンは、家族も持たず学問に専念してきた。その50年間の成果をもとにして今おこなっている研究の重要性を、裁判官たちに分らせようとしている。自分の死と共に宝物が失くなるのだと、国家にたいして自分個人を堂々と売りこんでいる。彼女だけが助かったのは、国家にとって、彼女の天職の成果が彼女の殺害より多くの利益をもたらすからである。シテルンは、スターリン時代より長生きし、89才まで生きた。

シテルン以外の被告は、8月12日に銃殺された。

次の年、1953年1月13日、ソヴェト国民は、「白衣の毒殺者たち」の犯罪について知らされた。クレムリンの医師たちが、党と政府の要人たちにわざとまちがった治療をして殺しただけでなく、彼らは外国のスパイであり、ミホエルスもその一味だったと発表された。この日はミホエルスの命日である。関係した医師たちのほとんどがユダヤ人であった。

ジダーノフの死がこの「事件」のきっかけになった。ジダーノフは、心臓病でありながら、文化のあらゆる分野での監督、指導の激務をスターリンという主人の細かい指示をうけながらおこない、1948年8月別荘で倒れた。クレムリン治療部の心電図室長であったチマシックは、スターリンの待医ヴィノグラードフその他の医学界の重鎮と共に8月28日飛行機で病人のもとへ急派された。チマシックは、心電図をとって、心筋梗塞と診断した。ところが教授たちは、これを誤診とみなし、診断書からこの病名を消すよう要求し、チマシックはいやいや上司の指示に従った。彼女は、このあと国家保安省警護本部長ヴラシク中将あてに手紙を書き、教授たちが誤った診断をし、誤った治療をしていると知らせた。ジダーノフは、再び発作をおこし、31日死去した。

解剖の結果、ジダーノフの死因は心筋梗塞であることが分った。その後、チマシックは、分院へ配置がえとなり、降格される。彼女はさらに数通の手紙を書いたが、なしのつづてに終わった。

それから4年たって、1952年8月、チマシックは、突然、国家保安省に呼び出され、手紙の内容に関して質問される。この後、ジダーノフの別荘で治療にあたっていた医師たちの逮捕と、それにかこつけて無関係なユダヤ人の医師の解任や逮捕が始まる。<sup>38</sup>

「事件」が公表されてから一週間後、「殺人者である医師たちの正体を暴露する手助けを政府におこなった」手柄で、チマシックはレーニン勲章をもらう。彼女は、口封じのため保安機関に

殺されたという噂があった。外国で出版された本にそのような記述もある。しかし、これは事実ではない。彼女に関心が集まらないようにするため、国家保安省が事故死という嘘をひろめたという。事故死が殺害に変わったのは、この国の歴史、とくに戦後の政治状況から見れば、民衆の自然な、当然の反応でもある。チマシックは、「事件」後、30年も生きた。

チマシックが国家保安省に呼ばれたあと、最初に逮捕されたユダヤ人医師の一人が、心臓病専門医ヤーコフ・エチンゲル教授である。すべてが終り時代がすっかり変ってから、ブルガーニン元首相が彼の息子に語ったところでは、ジダーノフ殺害その他の「罪」で逮捕された医師たちを、レニングラード、キーエフ、ミンスク等の大都市に分配し、それぞれ中央広場で公開で絞首刑にする予定であったという。<sup>39</sup>

ユダヤ人を狙いうちにした一連の「事件」と、それに煽られてひろがっていく反ユダヤ人感情は、ユダヤ人全体に、とりわけ、特権層に属するユダヤ人、逃げもかくれもできない著名なユダヤ人に恐怖をよびおこした。彼らのあいだで自衛策がねられた。

まず、自分たちユダヤ人が、「白衣の殺人者」であるユダヤ人医師たちの銃殺を要求する。次に、一般市民の「正当な怒り」がユダヤ人大衆へおよぶのを未然に阻止するため、遠くの僻地へユダヤ人を集団で移住させてほしいとスターリンに嘆願する。極刑と集団移住の要求がもられたスターリンへの手紙がつくれ、影響力のあるユダヤ人の学者、作家、芸術家、軍人等に署名がもとめられた。

作家ヴェシリー・グロスマンは、コスモポリトとして激しい批判をうけた歴史学者、イサアク・ミンツ科学アカデミー会員によって『ブラウダ』の編集局へ呼びだされた。この時のことを詩人セミョーン・リープキンに語っている。

「『ブラウダ』にはユダヤ系の著名な作家、学者、芸術家、俳優たちが集まっていた。ミンツがスターリンへの手紙の文案を読みあげ、集まった者たちはそれに署名するよう求められた。文意はこうだ。医者たちは卑劣な殺し屋で、極刑に処せられるべきだ、しかし、ユダヤ人大衆には罪がない、誠実な働き手、ソヴェト的愛国者がたくさんいる、等々。グロスマンによれば、弾圧され命をおとした新聞記者ミハイル・コリツォーフの実弟である諷刺マンガ家エフィーモフの発言は、ひときわ嫌らしかった。手紙は結局スターリンに送られなかった、そもそも手紙は上の方で考えだされたのではなく、事情通のエレンブルグが後になって我々に説明してくれたところでは、もろもろの特権をもつ我が身かわいさに党のユダヤ人のおえら方たちがやった企らみであった。しかし、その時は頭がどうかしていたのか、グロスマンは、少数の死という代価でこの不幸な民を救えると決めてかかり、集まった者の大多数と共にこの手紙に署名したのである。」<sup>40</sup>

エレンブルグもまた『ブラウダ』へ呼び出された。この時のことを、彼は、反ファシズム・ユダヤ人委員会の一員として殺された詩人マールキシンの未亡人エステルに語っている。

「『スターリンは、この手紙を知っていますか』と、エレンブルグはたずねた。

すると編集委員は、手書きの訂正のある文案を黙ってエレンブルグに渡した。エレンブルグに

はそれがスターリンの筆跡だと分った。

『手紙は明日公表しなければなりません』と、編集委員は言った。

『私は署名しません、出来ません』と、エレンブルグは言った。

『ブラウダ』からもどると、エレンブルグは、逮捕されたら必要になる身のまわりの品をそろえておくよう妻にたのんだ。」<sup>41</sup>

作家ヴェニアミン・カヴェーリンも『ブラウダ』に呼び出された。手紙には、ソヴェトに反ユダヤ主義が全くないと書かれていた。カヴェーリンには、ユダヤ人への迫害が署名者の完全な是認のもとにおこなわれることになるのが分った。彼は署名しなかった。<sup>42</sup>

ユダヤ人医師として逮捕されたが、生き残った病理解剖学者ヤーコフ・ラポポルトは、署名した者も時代の犠牲者だから名をあげない、しかし、拒否した者の名を告げるのは義務だと考え、ソヴェト人民芸術家レイゼン、コサック騎兵軍団司令官クレイゼル大将、イリヤ・エレンブルグ、作曲家ドゥナエフスキイの名をあげている。<sup>43</sup>

インベルは署名しただろうか。

レオナルド・ゲンドリンは、署名者としてエヴゲーニイ・ドルマトフスキイ、レフ・ニクーリン、ヴェーラ・インベル、アレクサンドル・ドウイムシツをあげている。<sup>44</sup>ドルマトフスキイは、ショスタコーヴィチの『森の歌』の作詞者である。ゲンドリンは、情報提供者としてはあまり信用できないが、インベルが署名を拒否したとしたら、それは自殺の決意と同じ意味をもつ。署名の拒否は、インベルがインベルを止めるときにのみ、可能である。

世間にユダヤ人移住の噂がひろまった。1930年代に外務人民委員であったが、ナチス・ドイツとの関係改善にはユダヤ人であることがさまたげになるので解任され、後に駐米大使になったマクシム・リトヴィーノフの妻アイニは、大人たちが逮捕されたり移住させられたりしたさいにそなえて、4人の孫に衣類や靴をつめたトランクを一つづつ用意した。親が逮捕されると、子供が施設送りになるからである。アイニは、息子の嫁にお金をわたして、ショスタコーヴィチ家へもっていくように言った。万一のさい、孫たちのために使ってもらうためである。

事情を知ったショスタコーヴィチは言った。

「われわれが奴隷であるという点で、コスモポリトにもユダヤ人にも皆にも罪がある。反ユダヤ主義は、文化と理性にむけられた闘いです。これは、われわれがユダヤ人よりも悪く、馬鹿で、しつけがなっていないことを白状するようなものです。」<sup>45</sup>

スターリンへの手紙は、『ブラウダ』に掲載されなかった。手紙から始まるはずの第2幕が中止あるいは延期された。その理由は不明である。

手紙の作成者たちは、文案をスターリンに見てもらい、スターリンは、習慣どおり鉛筆をもって注意深く添削したと考えられる。文案は、スターリンの意向を、ユダヤ人が先まわりして表現したものである。

上層部の知らないところで事が進められたという説は、スターリン体制のしくみ、掟、当時の

ソヴェト共産党員の行動形態から判断して、成り立たない。『プラウダ』の編集局でユダヤ人が署名活動をすることも、許可なしには全く不可能である。発案者がスターリンあるいは国家保安省の可能性すらある。結果的には、これは、スターリンとユダヤ人選良との合作であり、ユダヤ人大衆にたいする陰謀である。

手紙は残っていないが、手紙をめぐる諸事実は、ソヴェト・ユダヤ人の歴史における最も恥ずべき自己保全の例として歴史に残ることになった。

3月5日、史上最大の独裁者が死んだ。

3月15日、『プラウダ』にインベルのスターリン追悼詩がのった。これは、自分の血を呪っていた独裁者への、インベル最後の奉公である。『別れの時』というこのまずい詩は、これからの忠誠心でしめくられる。インベルは、現在に投機し、たえず明日へ投資していく。

霊廟の前で私たちは誓った  
嘆きの時、別れの時に誓った  
嘆く力を創造の力へ  
変えるのだと

肩と肩をもっと寄せあって  
生きている壁のように団結し  
我が党と一つになって  
命にいたるまでそれに捧げるのだと<sup>46</sup>

スターリンの死によって、「白衣の殺人者たち」についての陰謀は放棄され、ユダヤ人の医師たちは民衆の前で絞首になるのをまぬがれた。

人間のうちでスターリンが一番憎んでいたトロツキイの血縁という特殊な立場にあったインベルは、スターリン個人の関心がむけられる対象であり、生死の決定権は独裁者ににぎられていた。トロツキイを「人民の敵」第1号とみなしている国で、彼女は、貧弱な才能で詩という天職をひたすら自分の救命のために使った。スターリンとスターリン体制を讃えるために、彼女は、その時その場の政策に擬態した。

トロツキイの血縁、友人、知人、部下だけでなく、何の関係もない者もトロツキストとして収容所にいれられ、殺されるなかで、インベルは無傷であった。しかも、賞も勲章ももらい、スターリン時代には大変な特権であった海外出張も許されている。

戦後、ソヴェトが原爆開発を必死でおこなっているとき、最高責任者ベリヤ、大量の殺人にかかわったこの男が、核物理学者ハリトーノフに飛行機に乗ることを禁じた。原爆製造のためにはこの学者の命は、かけがえがなかったからである。インベルには、このたぐいの有用性はみじん

もない。仮に逮捕されても、生理学者シテルンのように、自分の仕事は国民にとって大切だとは言えないだろう。国家権力にとって、インベルの奉公は、醜女<sup>しごめ</sup>の深情けであった。

ユダヤ人絶滅をはかるヒトラー支配下のドイツで、「有益なユダヤ人」として使役された者がいる。ユダヤ人および混血ユダヤ人の作曲、作詞した曲は禁じられたが、ヨハン・シュトラウスの曲は例外であった。シュトラウスのワルツのように昔から生活の一部になるほど民衆の心に浸透した作品を排除するより、シュトラウスをユダヤ人でないかのようにあつかう方が支配者にとっては得である。

シュトラウスの待遇は、インベルにとって夢のまた夢であった。しかし、彼女は、一種の、あるいは、かろうじて「有益なユダヤ人」であった。ただし、才能によってではない。傷ゆえに必死の奉公をする、という理由で存在価値があった。インベルは、ヴィシンスキイの変種であった。転び伴天連<sup>ハテレン</sup>が人一ばいキリシタンを責めるように、ヴィシンスキイは、「人民の敵」狩りの職務に勤勉であった。

帝政時代の警察署長であったヴィシンスキイとはちがって、インベルは、自分の政治的な傷に責任がない。インベルの血は、自分の意志をこえた運命である。彼女は、その運命ゆえに骨身をけずって働き、恐怖づけの半生をおくった。

（未完）

注

- 1 Отечественная история. No.1. 1993. с.36.
- 2 Отечественная история. No.3. 1998. с.30.
- 3 Там же. с.32.
- 4 Там же. с.30—31.
- 5 本稿は、『飢えと天職』（論集第10号）の続篇である。  
インベルについては、あらためて説明しない。
- 6 Евгений Громов. Сталин: власть и искусство.  
《Республика》. Москва. 1998. с.416—417.
- 7 Совещание деятелей советской музыки в ЦК ВКП(б).  
《Правда》. Москва. 1948. с.5—6.
- 8 Там же. с.7.
- 9 Так это было. т. 2. 《Инсан》. Москва. 1993. с.169—172.
- 10 Там же. с.173.
- 11 Там же. с.108.
- 12 Там же. с.109.
- 13 Там же. с.106.
- 14 Совещание деятелей советской музыки в ЦК ВКП(б). с.161.
- 15 О журналах 《Звезда》 и 《Ленинград》.  
О репертуаре драматических театров и мерах по его улучшению. О кинофильме 《Большая жизнь》. Об опере 《Великая дружба》 В. Мурадели. 《Государственное издательство политической литературы》. Москва. 1951. с.26.
- 16 Там же. с.31.
- 17 Литературная газета. No.18 (3 марта). 1948.
- 18 Там же.
- 19 Наталия Вовси—Михоэлс. Мой отец Соломон Михоэлс. 《Возвращение》. Москва. 1997. с.197.
- 20 Там же. с.200.
- 21 Еврейский антифашистский комитет в СССР 1941—1948.  
Документированная история. 《Международные отношения》. Москва. 1996. с.317—318.
- 22 Мой отец Соломон Михоэлс. с.93.
- 23 Еврейский антифашистский комитет в СССР 1941—1948. с.289.
- 24 Там же. с.263.
- 25 Вопросы литературы. Выпуск 3. 1994. с.216.
- 26 Нева. No 9. 1994. с.293—294.
- 27 Валерий Сойфер. Власть и наука. История разгрома генетики в СССР. 《Эрмитаж》. New Jersey. 1989. с.454—456.
- 28 Большевик. No 3. 1951. с.29.
- 29 Так это было. Тихон Хренников о времени и о себе. 《Музыка》. Москва. 1994. с.145—147.
- 30 Мой отец Соломон Михоэлс. с.198.
- 31 Письма к другу. Дмитрий Шостакович—Исааку Гликману.  
《DSCH》. Москва. 《Композитор》. Санкт—Петербург. 1993. с.90.
- 32 Вера Инбер. Избранная проза. 《Государственное издательство художественной литературы》. Москва. 1952. с.383.
- 33 Там же. с.395.

- 34 Великие стройки сталинской эпохи. 《Государственное издательство политической литературы》. Москва. 1951. с.32.
- 35 Вера Инбер. Путь воды. 《Советский писатель》. Москва. 1951. с.42.
- 36 Неправедный суд. Последний сталинский расстрел. Стенограмма судебного процесса над членами Еврейского антифашистского комитета. 《Наука》. Москва. 1994. с.390.
- 37 Там же. с.373.
- 38 Новое время. No.28. 1993. с.38—41.
- 39 Новое время. No. 2 — 3. 1993. с.49.
- 40 Семен Липкин. Жизнь и судьба Василия Гроссмана. Анна Берзер. Прощание. 《Книга》. Москва. 1990. с.32—33.
- 41 Эстер Маркиш. Столь долгое возвращение... Воспоминания. Издание автора. Tel Aviv. 1989. с.305.
- 42 В. Каверин. Эпилог. Мемуары. 《Аграф》. Москва. 1997. с.334.
- 43 Я. П. Рапопорт. На рубеже двух эпох. Дело врачей 1953 года. 《Книга》. 1988. с.68.
- 44 Леонард Гендлин. Перебирая старые блокноты... 《Helicon Publishers》. Amsterdam. 1986. С.125.
- 45 Знамя. No.12. 1996. с.171.
- 46 Правда. No.74 (15 марта). 1953.

(1998. 8.31 受理)